

Discussion Paper Series

University of Tokyo
Institute of Social Science
Panel Survey

東京大学社会科学研究所 パネル調査プロジェクト
ディスカッションペーパーシリーズ

高校生の自信と卒業後の揺らぎ

The confidence that high school students have
and the change of their confidence after their graduation

伊藤秀樹

(東京大学大学院教育学研究科)

Hideki ITO

April 2008

No.13

高校生の自信と卒業後の揺らぎ

伊藤秀樹（東京大学大学院教育学研究科／日本学術振興会）

本稿の目的は、高校生の自信がどのように構成されているのか、そしてその自信が高校卒業後にどのように変動し再編成されるのかを明らかにすることにある。まず、高校生の自信は、学校生活での体験、パーソナリティ、アルバイト体験などを根拠とするが、家庭環境のあり方も学校生活での経験やパーソナリティの形成を迂回する形で間接的に自信に影響を及ぼす。しかし、高校時代に培われた自信は高校卒業後2年半後には揺らぎ、上級学校での学業成績や職場環境、経済的自立などの新しい環境での社会生活の体験によって再構成される。ただし、培われたパーソナリティは高校卒業後も自信の根拠となり続け、また経済的自立が自信へと結びつくのは家庭との関係が良好であった者に限られるという点から、高校卒業後の自信に関しても育ってきた家庭に影響を受けるといふ仮説が立てられる。

1.はじめに

現在進行している「自己責任社会」化や「人間力」の要請。これらは、誰もが前向きで柔軟、そして長期的な見通しをもてるというような「強い個人」である、そして誰もが「強い個人」になれるということを前提としたものであるという（荻谷 2001、本田 2007）。

そして「強い個人」の強さの基盤には、困難に立ち向かっていけるような自己への信頼、つまり自信や自己有能感と呼べるものがあると想定できる。しかし、荻谷や本田は高校生に対する質問紙調査のデータから自信が誰もが同じように獲得できるものではないということを指摘し、誰もが「強い個人」になれるという前提に一石を投じてきた。

たとえば荻谷（2001）は高校生の自信形成のメカニズムは社会階層ごとに異なり、低階層家庭出身の高校生においては学校的な業績主義的価値観からの離脱が自信を高めるということを指摘し、誰もが<主体的な学習者>（つまり「強い個人」）であることを想定した教育改革の問題性を暴きだしている。また本田（2007）や内藤・本田（2007）では本研究会の「高校生調査」のデータを用いて、多くの高校生にとって学業成績だけでなく家族関係や対人能力も自信の重要なリソースとなるということを明らかにしている。高校生の自信は、家庭環境によってそれを保持することができるか、またどのような要因が根拠となるのかということが違ってくるのである。

しかし自信というものは、社会生活を営む中で何らかの変動を見せるものであろう。ただ、荻谷や本田の分析は高校生の一時点を対象としたものであり、彼らが高校を卒業した後にはどれだけの人々の自信が保持される／変動するのか、またどのような要因によって自信が再構成されていくのかということについては検討されていない。本稿では本研究がパネル調査を行っているという点を生かして、これらの点について検討していく。

2.データと「自信スコア」

本稿の分析では、東京大学社会科学研究所が実施している 2003 年度に高校生であった者を対象とした高校卒業者のパネル調査（高卒パネル調査）の中から、2004 年 1 月に実施した「高校生調査」（高校 3 年、有効回答数 7563）と、2006 年 11～12 月に実施した「第 3 次追跡調査」A～C 票（高校卒業後 2 年半、有効回答数 548）のデータを用いる。これらのデータを用いて、高校生の自信の構成要因と高校卒業後 2 年半での自信の変動・再構成のあり方を確認していく。

自信に関する質問項目については、「私には人並みの能力がある」「全体として、自分に満足している」「自分には何のとりえもないと感じる」「決めたことは最後までやりとげる自信がある」という 4 項目が「高校生調査」「第 3 次追跡調査」の両方でたずねられている。

本研究ではこの4変数を軸として分析を進める。

これらの「高校生調査」「第3次追跡調査」における4変数の回答分布は、表1・表2のとおりである。

表1 自信に関する質問項目の回答分布(「高校生調査」)

(「高校生調査」)	「私には人並みの能力がある」	「全体として、自分に満足している」	「自分には何のとりえもないと感じる」	「決めたことは最後までやりとげる自信がある」
とてもあてはまる	10.8%	5.7%	12.8%	22.5%
ややあてはまる	45.6%	24.7%	34.7%	42.9%
あまりあてはまらない	34.3%	47.0%	36.8%	28.1%
まったくあてはまらない	6.5%	19.7%	12.8%	3.6%
無回答	2.8%	2.9%	2.9%	2.8%
	100.0% (7563)	100.0% (7563)	100.0% (7563)	100.0% (7563)
	56.4%	30.4%	47.5%	65.4%
	40.8%	66.7%	49.6%	31.8%

表2 自信に関する質問項目の回答分布(「第3次追跡調査」)

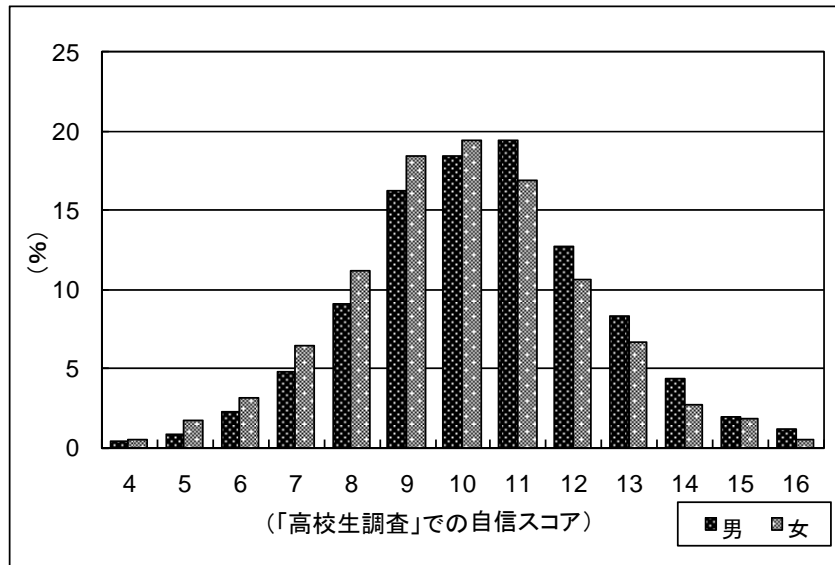
(「第3次追跡調査」)	「私には人並みの能力がある」	「全体として、自分に満足している」	「自分には何のとりえもないと感じる」	「決めたことは最後までやりとげる自信がある」
とてもあてはまる	10.9%	5.8%	7.7%	20.4%
ややあてはまる	46.5%	40.0%	33.2%	50.4%
あまりあてはまらない	37.6%	42.9%	47.4%	24.6%
まったくあてはまらない	4.2%	10.4%	10.8%	3.1%
無回答	0.7%	0.9%	0.9%	1.5%
	100.0% (548)	100.0% (548)	100.0% (548)	100.0% (548)
	57.5%	45.8%	40.9%	70.8%
	41.8%	53.3%	58.2%	27.7%

なお分析に先立ち、本田(2007)にならって上述の4項目を合成し「自信スコア」を作成しておく。「私には人並みの能力がある」「全体として、自分に満足している」「決めたことは最後までやりとげる自信がある」の3項目については「とてもあてはまる/ややあてはまる/あまりあてはまらない/まったくあてはまらない」にそれぞれ4・3・2・1点、「自分には何のとりえもないと感じる」については逆に1・2・3・4点のスコアを与え、それらを総和したものを「自信スコア」とする。スコアは4(最小値)~16(最大値)の値をとり、「高校生調査」ではスコアの平均値と標準偏差はそれぞれ10.18、2.15、「第3次追跡調査」では10.57、2.16である。スコアの総和が尺度として一貫性が高いかを示すクロンバッハの α 係数は「高校生調査」では0.55659、「第3次追跡調査」では0.67909である。

「高校生調査」における自信スコアの分布(男女別)を図1に示しておく。「第3次追跡調査」でも同様であるが、男性の方が女性に比べて自信スコアが高い傾向が見られる。¹

¹ 自信スコアの男女別の平均値は、「高校生調査」においては男性10.39、女性9.97、「第3次追跡調査」においては男性10.76、女性10.47。

図1 自信スコアの分布(「高校生調査」)



3.分析1:高校生の自信の構成要因

本章では、まずどのような高校生が自信を保持することができるかについて、「高校生調査」のデータから重回帰分析によって改めて詳細に確認していく²。また、高校生の自信と希望する進路との関係についてもクロス表によって確認しておく。

(1) 高校生全体における分析

まず従属変数には自信スコアを、独立変数には性別、学校タイプ、学校生活、パーソナリティ、家庭環境、アルバイト体験に関する変数を投入し³、高校生全体に重回帰分析を行った結果が表3である。

² 本田（2007）、内藤・本田（2007）でも「高校生調査」を用いて同様の試みが行われているが、本田（2007）では「第1回追跡調査」の保護者票とマッチングできる368サンプルのみが分析に用いられているため、サンプルバイアスがかかっている可能性があり、また自信と各項目との相関係数を求めるという形で分析が行われているが、この方法では関係が他の変数と独立したものであるか擬似的なものであるかを押さえることができないという課題がある。内藤・本田（2007）では重回帰分析を用いて分析を行っているが、図示化されているためにどのような独立変数を投入したのかが明らかでない。そのため、本稿では改めて重回帰分析を行うこととする。

³ 独立変数の作成方法は本稿末尾の付記を参照。

表3 高校生の自信についての重回帰分析(全体)

(独立変数:「高校生調査」での自信スコア)		高校生全体			
		モデル1		モデル2	
		B	β	B	β
性別	男性ダミー <基準:女性>	0.775	0.181 ***	0.481	0.112 ***
学校タイプ	普通科上位校ダミー	0.270	0.062 ***	0.311	0.071 ***
	専門学科ダミー <基準:普通科下位校・総合学科>	0.191	0.037 **	0.271	0.052 ***
学校生活	高校内成績	0.216	0.123 ***		
	部活動への熱中度	0.075	0.044 ***		
	先生の期待	0.190	0.077 ***		
パーソナリティ	対人能力スコア	0.296	0.352 ***		
	生活自律スコア	0.101	0.089 ***		
家庭環境	家族コミュニケーションスコア	0.024	0.037 **	0.087	0.133 ***
	親の期待	0.038	0.016	0.303	0.128 ***
アルバイト	アルバイト週1回以上ダミー	0.226	0.042 ***	0.291	0.054 ***
(定数)		3.104	***	7.502	***
N		6198		6330	
調整済みR ²		0.225		0.056	
F値		164.378		64.002	

※ ***:p<0.001 **:p<0.01 *:p<0.05 +:p<0.1

表3に関しては、以下の4点の特徴を指摘できる。

第一に、モデル1を確認すると、普通科上位校や専門学科に在籍していること、高校での成績が良いこと、部活動に打ち込んでいることといった学校生活の経験が自信スコアと0.1%水準で有意な正の連関をもっている。これより、定期テストや部活動、実習といった学校生活の中での成功体験は自信の根拠の一つとなりうるものだと考えることができる。

第二に、アルバイトを週1回以上行っていたことと、自信スコアには0.1%水準で正の連関が見られる。高校生は学校内だけで自信を調達するのではなく、学校外の生活からも自信を調達しているということがわかる。

第三に、対人能力スコアや生活自律スコアといったパーソナリティに関する変数が、自信スコアと0.1%水準で有意な正の連関をもっている。培われたパーソナリティも自信の根拠となりうるということがわかる。

ちなみに、対人コミュニケーションが得意である、あるいはお金や時間をきちんとマネジメントできるといったこれらのパーソナリティの修得の背景には、幼少時からの家庭での子育て・しつけのあり方が重要な役割を果たすであろうと考えられる。これより、家庭環境が自信へ影響をもたらしているということが推測される。

第四に、モデル1を確認すると、家庭環境と自信との関連については、家族コミュニケーションスコアに関しては自信スコアと有意な正の連関をもつが、影響力は他の独立変数と比べてあまり強くない。また、親の期待と自信スコアとの関連については有意ではない。

しかし、モデル1の結果は、学校生活やパーソナリティに関する独立変数によって統制を受けているものであるということを留意しておかなければならない。家族コミュニケー

ジョンスコアや親の期待といった変数は現時点での家庭の状況を示すものであるが、親の子どもへの関与のあり方はそれほど変動するものではないと考えられ、これらの変数は過去の子どもへの関与（あるいは子育て・しつけ）のあり方についてもある程度の説明力をもつ変数だと考えられる。そして、変数のなかで過去の子育て・しつけのあり方を説明している部分が、学校生活での成功体験やパーソナリティのあり方といった変数を迂回して自信に間接的に影響を及ぼしている、という可能性も想定できる。

実際に、独立変数から学校生活とパーソナリティに関する変数を外すと（表3のモデル2）、家庭環境に関する2変数はともに自信スコアと0.1%水準で有意な正の連関をもつようになる。そして、家庭環境に関する2変数は、学校生活やパーソナリティに関する変数のすべてと有意な正の相関関係をもっている（表4）。これより、表3のモデル1の分析では家族コミュニケーションスコアの説明力の一部が学校生活やパーソナリティに関する変数の統制を受けている、という可能性が考えられる。

表4 家庭環境と学校生活・パーソナリティとの関連

(相関係数)			学校生活			パーソナリティ	
			高校内成績	部活動への熱中度	先生の期待	対人能力スコア	生活自律スコア
家庭環境	家族内コミュニケーションスコア	Pearsonの相関係数 有意確率(両側) N	0.105 *** (7130)	0.103 *** (7130)	0.203 *** (7099)	0.249 *** (7099)	0.082 *** (7118)
	親の期待	Pearsonの相関係数 有意確率(両側) N	0.144 *** (7351)	0.176 *** (7375)	0.564 *** (7360)	0.168 *** (7320)	0.072 *** (7338)

これより家庭環境は、現在の家庭の状況がもたらす自信への直接的な影響は弱いかもしれないが、幼少時から現在に至るまでの子育て・しつけがパーソナリティに影響し、また家庭の日常的な支えが成績や部活動への熱中などの学校生活の過ごし方にも影響するなどして、間接的に自信の保持に影響を与えるものとなっているのではないかと推測できる。

(2) 男女別・学校タイプ別分析

次に、男女別、さらに学校タイプ別に重回帰分析を行い、それぞれの高校生の自信がどのように構成されているのかということを確認していく。というのも、荻谷（2001）や本田（2007）、内藤・本田（2007）において、性別や高校タイプ、家庭の社会階層グループによって自信を構成する要因が異なることが指摘されているためである。

しかし「高校生調査」では、社会階層に関する質問項目を設けていない。そのため、本稿では男女別、学校タイプ別における構成要因について再確認を行うこととしたい。⁴

⁴ 改めて分析を行う理由は、脚注2と同様である。

表5 高校生の自信についての重回帰分析(男女別)

(独立変数:「高校生調査」での自信スコア)		高校生			
		男性		女性	
		B	β	B	β
学校タイプ	普通科上位校ダミー	0.204	0.046 *	0.332	0.077 ***
	専門学科ダミー <基準:普通科下位校・総合学科>	0.176	0.037 +	0.214	0.036 *
学校生活	高校内成績	0.197	0.117 ***	0.244	0.135 ***
	部活動への熱中度	0.102	0.060 **	0.048	0.028 +
	先生の期待	0.145	0.061 **	0.235	0.094 ***
パーソナリティ	対人能力スコア	0.261	0.318 ***	0.332	0.371 ***
	生活自律スコア	0.085	0.076 ***	0.118	0.102 ***
家庭環境	家族コミュニケーションスコア	0.000	-0.001	0.045	0.068 ***
	親の期待	0.072	0.031	0.012	0.005
アルバイト	アルバイト週1回以上ダミー	0.317	0.055 **	0.184	0.036 *
(定数)		4.823	***	2.050	***
N		2939		3258	
調整済みR ²		0.185		0.257	
F値		67.546		113.911	

※ ***:p<0.001 **:p<0.01 *:p<0.05 +:p<0.1

まず男女別に重回帰分析を行ったものが表5であるが、以下の2つの特徴が指摘できる。第一に、部活動へ打ち込むことと自信スコアとの連関は、女性に関しては10%水準でようやく有意になる程度であり、女性の部活動に打ち込むことの自信への影響力は男性より弱いと考えられる。第二に、家族コミュニケーションスコアと自信スコアとの連関は、女性では0.1%水準で有意であるが、男性については有意ではない。これより、男子高校生は女子高校生と異なり、現在の家庭での会話量は自信には直接的な影響を与えないと考えることができる。⁵

表6 高校生の自信についての重回帰分析(男性・学校タイプ別)

(独立変数:「高校生調査」での自信スコア)		(男性のみ)					
		普通科上位校		普通科下位校・総合学科		専門学科	
		B	β	B	β	B	β
学校生活	高校内成績	0.229	0.131 ***	0.168	0.098 ***	0.164	0.103 **
	部活動への熱中度	0.082	0.047 +	0.156	0.093 **	0.097	0.058 +
	先生の期待	0.091	0.037	0.178	0.078 *	0.186	0.077 +
パーソナリティ	対人能力スコア	0.277	0.330 ***	0.253	0.319 ***	0.235	0.291 ***
	生活自律スコア	0.069	0.059 *	0.120	0.111 ***	0.084	0.076 *
家庭環境	家族コミュニケーションスコア	0.020	0.029	-0.007	-0.012	-0.027	-0.043
	親の期待	0.085	0.034	0.071	0.031	0.081	0.034
アルバイト	アルバイト週1回以上ダミー	0.105	0.011	0.386	0.078 **	0.330	0.066 +
(定数)		4.715	***	4.592	***	5.740	***
N		1239		1129		816	
調整済みR ²		0.174		0.210		0.145	
F値		33.577		38.448		18.305	

※ ***:p<0.001 **:p<0.01 *:p<0.05 +:p<0.1

⁵ ただし、男性において独立変数から学校生活とパーソナリティに関するものを除いて(表3のモデル2と同じ形で)重回帰分析を行うと、家族コミュニケーションスコアも親の期待も自信スコアと0.1%水準で有意な正の連関をもつ。これより、家庭のあり方は男性においても自信に間接的な影響を及ぼすものであるといえる。

表7 高校生の自信についての重回帰分析(女性・学校タイプ別)

(独立変数:「高校生調査」での自信スコア)		(女性のみ)					
		普通科上位校		普通科下位校・総合学科		専門学科	
		B	β	B	β	B	β
学校生活	高校内成績	0.204	0.111 ***	0.234	0.133 ***	0.330	0.177 ***
	部活動への熱中度	0.036	0.021	0.076	0.043 +	0.099	0.056
	先生の期待	0.263	0.106 ***	0.240	0.096 **	0.312	0.119 *
パーソナリティ	対人能力スコア	0.358	0.401 ***	0.313	0.353 ***	0.319	0.338 ***
	生活自律スコア	0.091	0.081 ***	0.132	0.114 ***	0.137	0.117 **
家庭環境	家族コミュニケーションスコア	0.047	0.070 **	0.033	0.050 *	0.057	0.084 *
	親の期待	-0.005	-0.002	0.014	0.006	-0.037	-0.015
アルバイト	アルバイト週1回以上ダミー	0.308	0.045 *	0.099	0.021	0.330	0.072 +
	(定数)	2.345	***	2.378	***	1.624	*
	N	1575		1396		503	
	調整済みR ²	0.259		0.239		0.268	
	F値	69.870		55.678		23.980	

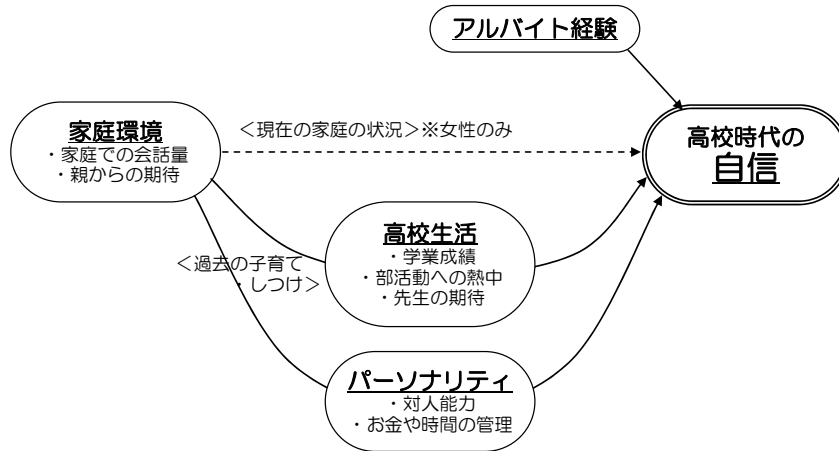
※ ***:p<0.001 **:p<0.01 *:p<0.05 +:p<0.1

次に、男性・女性に分けて学校タイプごとに重回帰分析を行ったものが、表6、表7である。男性については(表6参照)、部活動への熱中度や先生の期待、アルバイト経験などにおいて、学校タイプごとに異なる傾向が見られる。しかし、全体的な傾向として学校生活やパーソナリティが自信の構成要因となっていること、そして現在の家庭の会話量は自信と直接的な影響を与えないことを確認することができる。女性においては(表7参照)、普通科下位校・総合学科のみ部活動への熱中度と自信と10%水準で有意な連関がみられ、逆にアルバイト経験と自信との関連が有意ではないということ以外は、ほぼ共通の傾向を示している。

以上、重回帰分析を用いて高校生の自信の構成要因を確認していったが、得られた知見は以下の3点に整理することができる。第一に、学校生活の経験とパーソナリティ、アルバイト経験は、高校生の自信に根拠を与えるものとなっている。第二に、現在の家族との関係は女性のみ自信に影響を与えるが、過去の家庭の子育て・しつけのあり方が学校生活の体験やパーソナリティを迂回して間接的に自信に影響を及ぼしていると推測できる。第三に、同じ性別内での学校タイプ別の自信の構成要因にはわずかに差が見られるが、同じ傾向を示している部分も多い。

自信と家庭環境、学校生活、パーソナリティの関係を図示化すると、図2のようになる。

図2 高校生の自信の規定要因モデル



(3) 自信と希望する進路

これまで見てきたように、高校生の自信は学校生活での体験、パーソナリティ、アルバイト体験などを根拠とし、家庭の子育て・しつけなどは間接的に自信へと影響を及ぼしている。では、これらの自信は高校卒業後の進路とどのように関連するのだろうか。自信スコアを高（12～16）、中（10・11）、低（4～9）の3段階に分け、高校3年生の1月時点での卒業後の進路希望とのクロス分析を行った結果が表8である。

表8 自信と高卒後の進路希望

		正社員	専門学校	短大	四年制 大学	フリーター ・無業	合計	(度数)
自信	低(4～9)	24.0%	20.5%	10.5%	41.3%	3.7%	100.0%	(2658)
	中(10・11)	24.0%	20.9%	8.5%	44.2%	2.5%	100.0%	(2638)
	高(12～16)	23.1%	21.0%	7.6%	46.4%	1.9%	100.0%	(1799)
	合計	23.7%	20.8%	9.0%	43.7%	2.8%	100.0%	(7095)

表8をみると、自信スコアが高い者ほど四年制大学への進学を希望し、逆に自信スコアが低い者ほど短大やフリーター・無業を予定進路としている傾向があることがわかる。在籍する高校の学力ランクや学業成績などの進路への影響ももちろんあるだろうが⁶、自信をもてないことが短大やフリーター・無業という卒業後の進路選択をもたらす可能性もあるということも押さえておく必要があるだろう。

⁶ ただし、「高校生調査」の中でフリーター・無業を予定進路としている者は222人と少なく、本稿ではこれ以上詳細な分析は難しい。

4.分析2:高校卒業後の自信の変動と再構成

これまで高校生の自信がどのように構成されているか、また自信と予定進路との関係はどうなっているかを確認してきた。そして本章では、まず「高校生調査」と「第3次追跡調査」の自信に関する質問項目について回答の変化を確認し、どれだけの人々の自信が変動しているかを押さえる。次に、自信の変動は現在の状況ごとにどのような差異を見せるかということを確認する。そして、高校生時点のどのような要因が現在の自信にも影響を及ぼし続けているのか、また卒業後のどのような要因が自信の変動と関連をもつのかということ、探索的に調べていく。

(1) 高校卒業後の自信の変動

まず、「高校生調査」と「第3次追跡調査」の両方に回答した548サンプルにおいて、自信に関する4つの質問項目への回答が高校卒業後2年半でどのように変動したのかを確認する(表9)⁷。

表9 自信に関する質問項目の回答の変動

	高校時点 2年半後		(変化量)	2年半での変化				<変動率>	合計	(度数)
	○	○		○→○	x→○	○→x	x→x			
私には人並みの能力がある	67.0%	→ 58.0%	-9.0%	44.8%	13.2%	22.2%	19.7%	35.4%	100.0%	(522)
全体として、自分に満足している	36.6%	→ 46.6%	10.0%	22.9%	23.7%	13.7%	39.8%	37.4%	100.0%	(520)
決めたことは最後までやりとげる自信がある	70.7%	→ 72.4%	1.7%	56.8%	15.6%	13.9%	13.7%	29.5%	100.0%	(519)
	(x)	(x)		(x→x)	(○→x)	(x→○)	(○→○)			
自分には何のとりえもないと感じる	54.0%	→ 59.2%	5.2%	38.3%	20.9%	15.7%	25.1%	36.6%	100.0%	(522)

表9より、4つの質問項目すべてにおいて、×(あてはまらない)→○(あてはまる)あるいは○→×のように回答が変動している者が3~4割近くいるということが確認できる(<変動率>より)。サンプルバイアスという課題はあるため結果の解釈には留意が必要であるが、それでも、高校生のときにもっていた自信は決して固定的なものではなく、自信は卒業後の生活で揺らぐ可能性をもつものであるということが推測できる。

しかし、四年制大学や短大、専門学校に在学している者もいれば正社員あるいは非正社員として働いていたり、高校卒業後に身を置く環境は人によって大きく異なる。そのため、自信が変動する割合やその傾向には身を置く状況によって差が生じている可能性がある。そこで、まず現在の状況別に自信スコアの変動を確認したものが表10である。

⁷ 4つの質問項目の回答それぞれについて、「とてもあてはまる」「ややあてはまる」を『○』、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」を『×』と再分類している。

表10 現在の状況と自信スコア

	自信スコア			(度数)	
	高校時点	2年半後	変化量		
現在の状況	正社員・公務員・自営業主	10.64	→ 10.70	0.06	(116)
	非正社員	10.02	→ 9.92	-0.10	(63)
	四年制大学に在籍	10.58	→ 10.72	0.14	(262)
	短大・専門学校に在籍	11.02	→ 10.47	-0.56	(43)
	非就業・非就学	10.41	→ 10.50	0.09	(22)
	合計	10.55	→ 10.58	0.03	(506)

それぞれの変化量を比べてみると、短大・専門学校に在籍している者の自信スコアが他に比べて著しく低下している。しかし、彼らは高校生時点の自信スコアが高い者が多いという傾向があるため、2年半後の自信スコアを比べると非正社員以外とはそこまで変わらない。

むしろ注目すべきは2年半後に非正社員として就労している者の自信スコアである。彼らは高校時点でも自信スコアが低い者が多いという傾向があるが、2年半後も彼らの自信スコアの平均は他に比べて低いままである。非正社員としての就労には、高校時点で自信をあまりもてない者が結びつきやすく、また非正社員として働いていくうえでも他の人々と同じような自信を獲得しにくい状況にあるという可能性が考えられる。

次に、自信が変動している者の割合やその内実は高校卒業後の環境によって違いがあるのかということ、より詳細に確認していく。自信に関する4つの質問項目について、現在の状況と回答の変動の関係をみたものが表11～14である。

表11 「私には人並みの能力がある」の回答の変動(現在の状況別)

「私には人並みの能力がある」	高校時点	2年半後	(変化量)	2年半での変化				合計 (度数)		
	○	○		○→○	×→○	○→×	×→×		<変動率>	
正社員・公務員・自営業主	68.1%	→ 64.7%	-3.4%	49.1%	15.5%	19.0%	16.4%	34.5%	100.0%	(116)
非正社員	57.1%	→ 46.0%	-11.1%	33.3%	12.7%	23.8%	30.2%	36.5%	100.0%	(63)
四年制大学に在籍	69.4%	→ 57.7%	-11.7%	46.4%	11.3%	23.0%	19.2%	34.3%	100.0%	(265)
短大・専門学校に在籍	73.3%	→ 64.4%	-8.9%	51.1%	13.3%	22.2%	13.3%	35.6%	100.0%	(45)
非就業・非就学	54.5%	→ 45.5%	-9.1%	22.7%	22.7%	31.8%	22.7%	54.5%	100.0%	(22)
合計	67.3%	→ 57.9%	-9.4%	44.8%	13.1%	22.5%	19.6%	35.6%	100.0%	(511)

表12 「全体として、自分に満足している」の回答の変動(現在の状況別)

「全体として、自分に満足している」	高校時点	2年半後	(変化量)	2年半での変化				合計 (度数)		
	○	○		○→○	×→○	○→×	×→×		<変動率>	
正社員・公務員・自営業主	36.2%	→ 50.9%	14.7%	19.0%	31.9%	17.2%	31.9%	49.1%	100.0%	(116)
非正社員	36.5%	→ 38.1%	1.6%	19.0%	19.0%	17.5%	44.4%	36.5%	100.0%	(63)
四年制大学に在籍	36.7%	→ 47.7%	11.0%	26.5%	21.2%	10.2%	42.0%	31.4%	100.0%	(264)
短大・専門学校に在籍	45.5%	→ 38.6%	-6.8%	22.7%	15.9%	22.7%	38.6%	38.6%	100.0%	(44)
非就業・非就学	27.3%	→ 54.5%	27.3%	18.2%	36.4%	9.1%	36.4%	45.5%	100.0%	(22)
合計	36.9%	→ 46.8%	9.8%	23.2%	23.6%	13.8%	39.5%	37.3%	100.0%	(509)

表13 「決めたことは最後までやりとげる自信がある」の回答の変動(現在の状況別)

「決めたことは最後までやりとげる自信がある」	高校時点 2年半後		(変化量)	2年半での変化				合計 (度数)		
	○	○		○→○	×→○	○→×	×→×		<変動率>	
正社員・公務員・自営業主	73.3%	→ 72.4%	-0.9%	56.9%	15.5%	16.4%	11.2%	31.9%	100.0%	(116)
非正社員	59.4%	→ 53.1%	-6.3%	39.1%	14.1%	20.3%	26.6%	34.4%	100.0%	(64)
四年制大学に在籍	70.6%	→ 78.6%	8.0%	62.2%	16.4%	8.4%	13.0%	24.8%	100.0%	(262)
短大・専門学校に在籍	77.3%	→ 63.6%	-13.6%	50.0%	13.6%	27.3%	9.1%	40.9%	100.0%	(44)
非就業・非就学	77.3%	→ 77.3%	0.0%	59.1%	18.2%	18.2%	4.5%	36.4%	100.0%	(22)
合計	70.7%	→ 72.6%	2.0%	56.9%	15.7%	13.8%	13.6%	29.5%	100.0%	(508)

表14 「自分には何のとりえもないと感じる」の回答の変動(現在の状況別)

「自分には何のとりえもないと感じる」	高校時点 2年半後		(変化量)	2年半での変化				合計 (度数)		
	(×)	(×)		○→○	×→○	○→×	×→×		<変動率>	
正社員・公務員・自営業主	51.7%	→ 63.8%	12.1%	41.4%	22.4%	10.3%	25.9%	32.8%	100.0%	(116)
非正社員	40.6%	→ 57.8%	17.2%	26.6%	31.3%	14.1%	28.1%	45.3%	100.0%	(64)
四年制大学に在籍	57.6%	→ 58.0%	0.4%	40.9%	17.0%	16.7%	25.4%	33.7%	100.0%	(264)
短大・専門学校に在籍	55.6%	→ 66.7%	11.1%	40.0%	26.7%	15.6%	17.8%	42.2%	100.0%	(45)
非就業・非就学	54.5%	→ 40.9%	-13.6%	18.2%	22.7%	36.4%	22.7%	59.1%	100.0%	(22)
合計	53.8%	→ 59.3%	5.5%	38.2%	21.1%	15.7%	25.0%	36.8%	100.0%	(511)

サンプル数の問題から結果には留保がつくものではなるが、表11～14からは、以下の2点が指摘できる。

第一に、<変動率>を確認すると、どの質問項目でもほぼすべての状況で3割以上の人の回答が変動しているということがわかる。これより、高校時代に培った自信はどの卒業後の環境においても揺らぎを経験するということがわかる。

第二に、どの現在の状況においても自信スコアの変動はそれほど大きくなかったが、質問項目ごとに確認すると、状況ごとにそれぞれ違った形で高めやすい自信の要素と失いやすい自信の要素が存在していることがわかる。たとえば四年制大学に在籍する者では「全体として、自分に満足している」「決めたことは最後までやりとげる自信がある」と思える者は増えているが、逆に「私には人並みの能力がある」と思える者は減っている。しかし正社員・公務員・自営業主として就労する人々は四年制大学の在籍者とは違う傾向を示す。

以上より、高校時代に培った自信は卒業後にどの環境に身を置いても揺らぎを経験すること、しかしその揺らぎの内実は身を置く環境によって異なる可能性があることがわかった。このように高校時代に培った自信が揺らぎを経験する中で、次節では、高校時代に培った自信の根拠はどのようなものが2年半後にも自信の根拠であり続け、またどのようなものが影響力を失うのかということを確認する。

(2) 高校時代の自信の根拠の2年半後の影響力

表3などの重回帰分析で示したとおり、高校生の自信には性別、在籍する高校のタイプ、学校生活での体験、パーソナリティ、家庭環境やアルバイト経験などが影響をもたらしていた。これらの要因が2年半後も自信の根拠となり続けているかを確認するために、本稿では「高校生調査」と「第3次追跡調査」で自信に関する質問項目すべてに回答している

サンプルを抽出し、従属変数を「高校生調査」と「第3次追跡調査」の自信スコアにして重回帰分析を行い、高校生時点の独立変数の説明力を比較するという方法をとった。その結果が表15である。

表15 自信の根拠の変化(重回帰分析より)

		高校生時点での 自信スコア		高校卒業後2年半での 自信スコア		
		B	β	B	β	
※ 高 校 生 時 点 で の 変 数	性別	男性ダミー <基準:女性>	0.489	0.108 **	0.495	0.111 *
	学校タイプ	普通科上位校ダミー	0.096	0.022	0.426	0.098 +
		専門学科ダミー <基準:普通科下位校・総合学科>	0.156	0.028	0.420	0.076
	学校生活	高校内成績	0.107	0.061	-0.034	-0.019
		部活動への熱中度	0.126	0.072	0.045	0.026
		先生の期待	0.310	0.126 *	0.127	0.052
	パーソナリティ	対人能力スコア	0.371	0.415 ***	0.257	0.290 ***
		生活自律スコア	0.061	0.054	0.154	0.138 **
	家庭環境	家族コミュニケーションスコア	-0.002	-0.003	-0.002	-0.003
		親の期待	0.016	0.007	-0.073	-0.032
アルバイト	アルバイト週1回以上ダミー	0.150	0.025	0.188	0.032	
(定数)		3.245	***	5.183	***	
N		450		450		
調整済みR ²		0.230		0.114		
F値		13.253		6.280		

※ ***:p<0.001 **:p<0.01 *:p<0.05 +:p<0.1

表15からは、3点のことが指摘できる。

第一に、普通科上位校に在籍していたことが、高校生時点では自信スコアと有意な関連をもっていないにもかかわらず、高校卒業後2年半の自信スコアとは有意な正の連関がみられるようになる。これより、普通科上位校に在籍する者は高校卒業後に自信を保持しやすい環境に結びつきやすいということが考えられる。

第二に、学校生活に関する独立変数の自信スコアへの説明力は、高校時代に比べて高校卒業後2年半でどの変数も低下している。とくに、高校内成績に関しては標準化係数の符号が反転している。これより、高校生活の体験は高校卒業後には自信の根拠としにくいものとなると考えられる。そしてこの変化は、自信の揺らぎをもたらす重要な要因の一つとなっているであろう。

第三に、高校生時点におけるパーソナリティに関する独立変数は、高校卒業後2年半でも自信スコアと有意な正の連関をもっている。パーソナリティは家庭の子育て・しつけのあり方に影響を受けるものだと考えられるため、この結果から家庭の子育て・しつけが高校卒業後の自信にも影響してくるということも推測できる。

以上より、高校時代に自信の根拠となっていた要因について、学校生活の経験の自信への影響力は高校卒業後には大幅に弱まるが、家庭の子育て・しつけなどによって培われて

いたパーソナリティは依然として自信に影響し続けることがわかった。次節では、高校卒業後の生活で新たに自信の根拠となりうる要因は何かということを確認していく。

(3) 高校卒業後の自信の根拠

高校卒業後の自信の根拠となるものとしては、職場環境、学校生活、経済的自立、アルバイト経験などさまざまなものが考えられる。しかし、就労している者もいれば就学している者もいるように、現在身を置く環境は個人によって大幅に異なる。そのため、現在の状況別に、自信スコアと現在の生活に関する変数との関連について自信スコアの平均値を比較する形で探索的に確認を行っていった。

結果、3つの要因について自信スコアとの特徴的な傾向が見られた。その3つとは、就学している者における中等後教育での成績、就労している者における職場環境、そして経済的に自立しているかどうかである。⁸

a. 中等後教育の成績と自信

表16 中等後教育の成績と自信スコア

			自信スコア				(度数)
			高校生	2年半後	変化量	変化の差	
現在の状況	四年制大学に在籍	優	10.81	→ 10.98	0.17	} 0.63	(59)
		良	10.55	→ 10.85	0.30		(157)
		可・不可	10.37	→ 9.91	-0.46		(46)
	短大・専門学校に在籍	優	11.11	→ 11.44	0.33	} 1.65	(9)
		良	11.28	→ 10.94	-0.33		(18)
		可・不可	10.69	→ 9.38	-1.31		(16)

四年制大学在籍者と短大・専門学校在籍者について、それぞれ成績ごとに自信スコアの変化を確認すると（表16）、「可・不可」と回答している者たちは他の者に比べて高校生時点の自信も低いが、さらに自信を喪失しているという傾向がみられる。これより、成績をはじめとして在籍する学校の体験は中等後教育においても自信の根拠となりうるという可能性も推測できる。

⁸ これ以降の分析に関しては、現在の状況別に分析を行っているためにサンプル数が非常に少ないものも含まれるようになる。そのため結果を過度に一般化することは危険であり、以降の分析は高校卒業後の自信に関する仮説を生成することを目的とする。

b.職場環境と自信

表17 職場環境と自信スコア

		正社員・公務員・自営業主					非正社員				
		自信スコア				(度数)	自信スコア				(度数)
		高校生	2年半後	変化量	変化の差		高校生	2年半後	変化量	変化の差	
現在の仕事	希望していた職種である	○	10.90 → 10.85	-0.04	> -0.28	(89)	9.91 → 10.00	0.09	> 0.68	(46)	
		×・わからない	9.88 → 10.12	0.23		(26)	10.29 → 9.71	-0.59		(17)	
	有名な会社である	○	10.49 → 10.78	0.29	> 0.65	(69)	9.97 → 9.59	-0.38		(37)	
		×・わからない	10.96 → 10.60	-0.36		(45)	10.24 → 10.32	0.08	> -0.46	(25)	
	給料が良い	○	10.89 → 11.43	0.54	> 0.75	(37)	9.96 → 9.87	-0.09		(23)	
		×・わからない	10.57 → 10.36	-0.21		(76)	10.15 → 9.90	-0.26	> 0.17	(39)	
	残業が少ない、休日が多い	○	10.68 → 10.58	-0.10	> -0.21	(40)	10.09 → 10.13	0.03	> 0.46	(32)	
		×・わからない	10.68 → 10.78	0.11		(74)	10.07 → 9.63	-0.43		(30)	
	高校で学んだことが生かせる	○	10.54 → 11.10	0.56	> 0.80	(39)	9.88 → 10.12	0.24	> 0.55	(17)	
		×・わからない	10.75 → 10.51	-0.24		(75)	10.14 → 9.82	-0.32		(44)	
	先輩が仕事についてよく教えてくれる	○	10.40 → 10.77	0.37	> 1.58	(90)	10.18 → 10.09	-0.09	> 1.31	(57)	
		×・わからない	11.71 → 10.50	-1.21		(24)	9.00 → 7.60	-1.40		(5)	
研修機会に恵まれている	○	10.45 → 10.86	0.41	> 0.94	(69)	9.79 → 10.00	0.21	> 0.88	(34)		
	×・わからない	11.02 → 10.49	-0.53		(45)	10.43 → 9.75	-0.68		(28)		

※ 変化の差については、0.5以上の差があるものを太字+下線としている。

就労している者に関しては、職場環境のあり方が自信に影響を与えるようである（表17参照）⁹。表17からは、大きく3つの特徴が指摘できる。

第一に、正社員・公務員・自営業主のあいだでも非正社員のあいだでも、「高校で学んだことが生かせる」「先輩が仕事についてよく教えてくれる」「研修機会に恵まれている」職場に勤めている者とそうでない者の自信の変化には大きな差が生まれるという特徴がみられる。高校での学習を仕事に活用させてもらえる、また研修などで職業能力を高められるような職場環境が、就労している者の自信を支えるものとなる可能性が示唆される。¹⁰

第二に、非正社員のみにもみられる特徴として、「希望していた職種である」かどうか自信の変化に差を生み出すということがある。非正社員の道を自らが仕事内容から積極的に選んだ場合には自信は低下しないのではないかと推測できる。

第三に、正社員などにおいては「給料が良い」かどうか自信の変化に差を生み出している。これは、労働条件の良い職場と職業能力を研修などで高められる職場とでは相関関係が高いという解釈も可能だが、むしろ次項での分析をふまえると、給料が良いことで経済的自立という形で自信を高めることが可能となるためという解釈が妥当であると考えられる。

⁹ 「第3次追跡調査」の現在の仕事に関する質問項目それぞれについて、「とてもあてはまる」「ややあてはまる」を『○』、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」「わからない」を『×・わからない』と再分類している。

¹⁰ ちなみに、正社員などにおける「有名な会社である」という項目に自信スコアの変化の差がみられることに関しては、大きな会社ほど研修制度がしっかりしていることが影響しているという可能性が考えられる。

c. 経済的自立と自信

表18 経済的自立と自信スコア¹¹

		自信スコア				(度数)	
		高校生	2年半後	変化量	変化の差		
現在の 状況	正社員・公務員・自営業主	経済的に自立している	10.94 → 11.25	0.31	>	0.59	(65)
		経済的に自立していない	10.30 → 10.02	-0.28	>		(50)
	非正社員	経済的に自立している	9.91 → 10.41	0.50	>	0.91	(22)
		経済的に自立していない	10.07 → 9.66	-0.41	>		(41)
	四年制大学に在籍	経済的に自立している	10.75 → 11.34	0.59	>	0.56	(32)
		経済的に自立していない	10.55 → 10.58	0.03	>		(220)
	専門学校・短大に在籍	経済的に自立している	11.43 → 11.57	0.14	>	0.84	(7)
		経済的に自立していない	10.94 → 10.25	-0.69	>		(36)
	非就業・非就学	経済的に自立している	11.67 → 10.67	-1.00	>	-1.26	(3)
		経済的に自立していない	10.21 → 10.47	0.26	>		(19)
	合計	経済的に自立している	10.76 → 11.13	0.37	>	0.49	(129)
		経済的に自立していない	10.48 → 10.36	-0.12	>		(366)

※ 変化の差については、0.5以上の差があるものを太字+下線としている。

表18は現在の状況別に経済的自立と自信スコアの変化の差を見たものであるが、サンプル数が少ない非就業・非就学の層を除くとどの層でも自信スコアの変化に大きな差が出ている。これより、経済的に自立しているか否かは高校卒業後の自信の重要な根拠の一つとなっていると考えてよいだろう。

以上、高校卒業後の自信の根拠について、高校での学校生活の体験の代わりに在籍する学校の体験や職場の環境、そして経済的に自立しているか否かが根拠となっている可能性を示してきた。しかし、これらの要因についても家庭環境のあり方が大きく関与している可能性がある。

たとえば、経済的自立が高校卒業後の自信の変化に差を生む傾向を見いだしたが、さらに家族コミュニケーションとの関連を見てみると、実は高校時代に家庭で会話量が多かった者に関しては経済的自立が自信を高めるが、家庭での会話量が少なかった者に関しては経済的に自立していても自信はそれほど高まらない(表19参照)。これより、経済的に自立することで必然的に自信が高められるのではなく、家庭の心理的な支えを受けられるような状態で経済的自立をすることではじめて自信は高まるものである、という可能性が考えられる。

¹¹ 「第3次追跡調査」の中の「経済的に自立した生活をしている」という質問項目について、「とてもあてはまる」「少しあてはまる」を『経済的に自立している』、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」を『経済的に自立していない』と再分類している。

表19 職場環境と自信スコア

			自信スコア				(度数)		
			高校生	2年半後	変化量	変化の差			
家庭 シ ョ ン ケ ー	高(18~24)	経済的に自立している	11.06	→ 11.62	0.55	>	0.88	(47)	
		経済的に自立していない	10.93	→ 10.61	-0.32	>	↓	0.51	(121)
	中(15~17)	経済的に自立している	10.61	→ 11.00	0.39	>	↓	0.51	(41)
		経済的に自立していない	10.37	→ 10.26	-0.12	>	↓	0.09	(145)
	低(8~14)	経済的に自立している	10.60	→ 10.73	0.13	>	↓	0.09	(40)
		経済的に自立していない	10.17	→ 10.21	0.04	>	↓	0.09	(100)
合計	経済的に自立している	10.77	→ 11.14	0.37	>	↓	0.51	(128)	
	経済的に自立していない	10.50	→ 10.36	-0.14	>	↓	0.51	(366)	

家庭環境と高校卒業後の自信に関しては、経済的自立を自信の根拠とできるかが彼らの育ってきた家庭に影響されるということだけでなく、家庭の子育て・しつけのあり方に影響されるであろうパーソナリティが高校卒業後も相変わらず自信の根拠となり続けていたということも示してきた。これらを考慮すると、どのような家庭に育ってきたかということは高校卒業後の自信とも決して無関係のものではないのではないか、という仮説を立てることができるだろう。

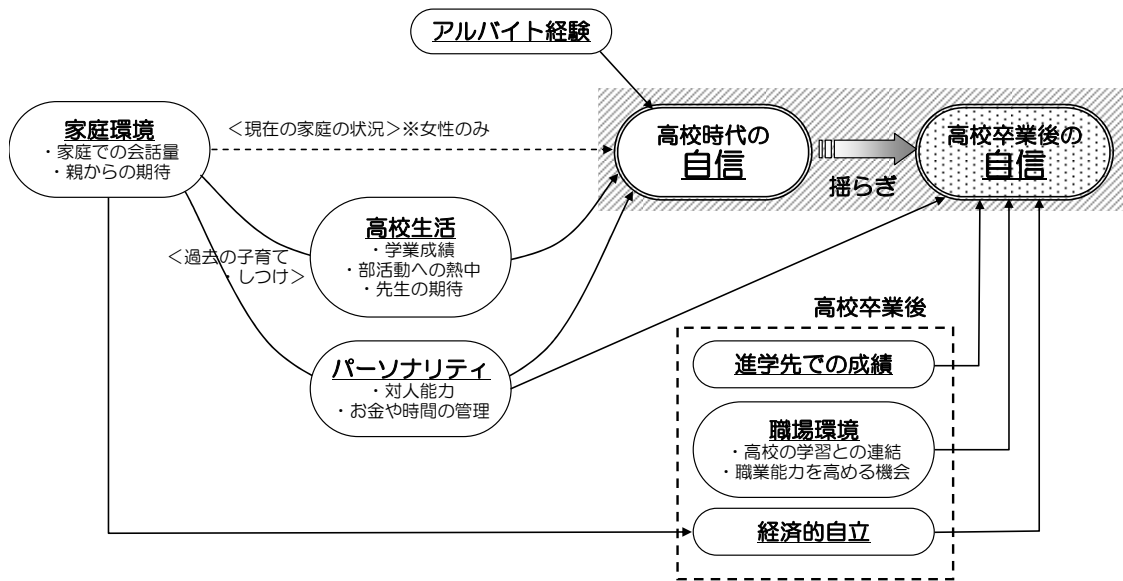
5.まとめ

以上、高校生の自信はどのようなものを根拠として構成されているのか、そして高校卒業後にその自信はどの程度変動し、どのようなものを根拠として再構成されるのかということを確認してきた。分析結果を改めてまとめると、以下のように整理できる。

まず高校生の自信は、学校生活での体験、パーソナリティ、アルバイト体験などを根拠としていた。また先行研究でも指摘されるような家庭環境のあり方も、学校生活での経験やパーソナリティの形成を迂回して間接的に自信に影響を及ぼしている可能性が示唆された。しかし、高校時代に培われた自信は高校卒業後2年半後には揺らぎ、上級学校での学業成績や職場環境、経済的自立などの新しい環境での社会生活の体験によって再構成されていた。ただし、パーソナリティは相変わらず自信の根拠となり続けている、また経済的自立が自信へと結びつくのは家庭との関係が良好な者に限られるという点から、卒業後の自信に関しても彼らが育ってきた家庭の影響を無視することはできないという仮説が立てられた。

彼らの自信とその根拠に関して図示化すると、図3のようなモデルを描くことができる。

図3 高校卒業後の自信とその根拠モデル



本稿の高校卒業後における分析に関しては十分なサンプル数が確保できていないとはいえず、本稿の知見を過度に一般化して考えることは危険である。そのため本稿の高校卒業後における知見についてはあくまで仮説として考え、今後十分なサンプル数のデータを用いて、人々の自信がどのように構成されているのかを改めて検討していく必要があるだろう。

しかし、本稿の知見を問題関心に照らし合わせてみると、少なくとも、誰もが「強い個人」である、あるいは誰もが「強い個人」になれるという前提の怪しさは見いだすことができるであろう。「強い個人」の強さの基盤である自信は決して固定的なものではなく、次の環境に移行することで揺らぎを見せうるものである。そして、高校時代はもちろん高校卒業後においても、育ってきた家庭によって自信を保持できるかできないかが左右されていると推測できる。「強い個人」の強さの基盤は、誰もが安定的に保持できるものでも、誰もが平等に保持できるものでもない可能性が高いのである。

困難にも立ち向かっていける「強い個人」を前提として、駆動していく「自己責任社会」化や「人間力」への要請。しかしその前提が怪しいものであるならば、これらの社会のビジョンを問い直し、新たな社会のビジョンを構想していく必要があるのではないだろうか。

付記 重回帰分析における独立変数の作成方法

<性別> (基準：女性)

- ・ 男性ダミー：男性を1、女性を0とした。

<学校タイプ> (基準：普通科下位校・総合学科)

- ・ 普通科上位校ダミー：普通科上位校に在籍する者を1、それ以外の者を0とした。
- ・ 専門学科ダミー：専門学科に在籍する者を1、それ以外の者を0とした。

<学校生活>

- ・ 高校内成績：「高校でのあなたの今の成績はどのくらいですか」という5段階でたずねた質問項目について、「上のほう」を5点～「下のほう」を1点とスコア化した。
- ・ 部活動への熱中度：「部（クラブ）活動に打ち込んでいる」という4段階でたずねた質問項目について、「とてもあてはまる」を4点～「まったくあてはまらない」を1点とスコア化した。
- ・ 先生の期待：「先生は私が高校でがんばることを期待している」という4段階でたずねた質問項目について、「とてもあてはまる」を4点～「まったくあてはまらない」を1点とスコア化した。

<パーソナリティ>

- ・ 対人能力スコア：本田（2007）にならって、「友だちから悩み事を打ち明けられることが多い」「自分の考えをはっきり相手に伝えることができる」「友だちが間違っただけをしたら指摘すべきだと思う」「自分には人を引っぱっていく力がある」「嫌いな人、苦手な人とも、うまく付き合う努力をしている」という4段階でたずねた5つの質問項目について、「とてもあてはまる」を4点～「まったくあてはまらない」を1点としたスコアの総和を「対人能力スコア」（最小値 5～最大値 20）とした。クロンバッハの α 係数は 0.65098。
- ・ 生活自律スコア：「お金は計画的につかうほうだ」「時間には正確な方だ」「起こされなくても、朝は一人で起きられるほうだ」という4段階でたずねた3つの質問項目について、「とてもあてはまる」を4点～「まったくあてはまらない」を1点としたスコアの総和を「生活自律スコア」（最小値 3～最大値 12）とした。クロンバッハの α 係数は 0.46451。

<家庭環境>

- ・家族コミュニケーションスコア：本田（2007）にならって、「学校での出来事」「授業の内容」「成績」「高卒後の進学」「高卒後の就職」「世のなかの出来事」「悩み事」「あなたの将来」の8項目について家族（保護者）とどれほどひんぱんに話し合うかを3段階でたずねた質問項目について、「ひんぱんに」を3点、「時々」を2点、「まったく」を1点として8項目の点数を総和したものを「家族コミュニケーションスコア」（最小値8～最大値24）とした。クロンバッハの α 係数は0.78410。
- ・親の期待：「親は私が高校でがんばることを期待している」という4段階で質問項目について、「とてもあてはまる」を4点～「まったくあてはまらない」を1点とスコア化した。

<アルバイト体験>

- ・アルバイト週1回以上ダミー：高校3年の4～7月頃に1週間の平均でどのくらいアルバイトをしたかについて尋ねた質問項目について、「週1～2度」「週3度～毎日」を1、「まったくない／まれに」「週1度より少ない」を0とした。

参考文献・引用文献

- 本田由紀，2005，『多元化する「能力」と日本社会 ―ハイパー・メリトクラシー化のなかで』NTT出版。
- 本田由紀，2007，「母親の子育て方針と高校生の自信」『若年者の就業行動・意識と少子高齢社会の関連に関する実証研究 平成18年度総括研究報告書』。
- 苅谷剛彦，2001，『階層化日本と教育危機』有信堂。
- 内藤朝雄・本田由紀，2007，「『若者たちの現在』 ―眼差しを上げて生きるために―」内藤朝雄『いじめと現代社会』双風舎，11-47。

東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクトについて

労働市場の構造変動、急激な少子高齢化、グローバル化の進展などにともない、日本社会における就業、結婚、家族、教育、意識、ライフスタイルのあり方は大きく変化を遂げようとしている。これからの日本社会がどのような方向に進むのかを考える上で、現在生じている変化がどのような原因によるものなのか、あるいはどこが変化してどこが変化していないのかを明確にすることはきわめて重要である。

本プロジェクトは、こうした問題をパネル調査の手法を用いることによって、実証的に解明することを研究課題とするものである。このため社会科学研究所では、若年パネル調査、壮年パネル調査、高卒パネル調査の3つのパネル調査を実施している。

本プロジェクトの推進にあたり、以下の資金提供を受けた。記して感謝したい。

文部科学省・独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金
基盤研究 S：2006 年度～2010 年度

厚生労働科学研究費補助金
政策科学推進研究：2004 年度～2006 年度

奨学寄付金
株式会社アウトソーシング（代表取締役社長・土井春彦、本社・静岡市）：2006 年～

東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクト ディスカッションペーパーシリーズについて

東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクトディスカッションペーパーシリーズは、東京大学社会科学研究所におけるパネル調査プロジェクト関連の研究成果を、速報性を重視し暫定的にまとめたものである。

東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクト ディスカッションペーパーシリーズ

- No.1 山本耕資 標本調査における性別・年齢による層化の効果：100 万人シミュレーション（2007 年 4 月発行）
- No.2 石田浩
三輪哲
山本耕資
大島真夫 仕事・健康・希望：「働き方とライフスタイルの変化に関する調査（JLPS）2007」の結果から（2007 年 12 月発行）
- No.3 中澤渉 性別役割分業意識の日英比較と変動要因：British Household Panel Survey を用いて（2007 年 12 月発行）
- No.4 戸ヶ里泰典 大規模多目的一般住民調査向け東大健康社会学版 SOC3 項目スケール：(University of Tokyo Health Sociology version of the SOC3 scale: SOC3-UTHS)の開発（2008 年 1 月発行）
- No.5 戸ヶ里泰典 20～40 歳の成人男女における健康保持・ストレス対処能力 sense of coherence の形成・規定にかかわる思春期及び成人期の社会的要因に関する研究（2008 年 1 月発行）
- No.6 田辺俊介
相澤真一 職業・産業コーディングマニュアルと作業記録（2008 年 2 月発行）
- No.7 中澤渉 若年層における意識とライフスタイル：JLPS と BHPS における日英の家事労働と性役割意識の比較（2008 年 3 月発行）
- No.8 深堀聡子 若者の働くこと・結婚すること・子どもをもつことに関わる意識
高卒パネル（JLPS-H）と NELS による日米比較（2008 年 3 月発行）
- No.9 戸ヶ里泰典 若年者の婚姻および就業形態と健康状態、健康関連習慣との関連性の検討（2008 年 3 月発行）
- No.10 三輪哲 働き方とライフスタイルの変化に関する全国調査 2007 における標本特性と欠票についての基礎分析（2008 年 3 月発行）
- No.11 安藤理 公共政策支持の規定要因～公共事業と所得再分配に着目して～（2008 年 4 月発行）
- No.12 長尾由希子 若年男女における性別役割分業意識の変化とその特徴：高校生のパネル調査から（2008 年 4 月発行）

No.13 伊藤秀樹 高校生の自信と卒業後の揺らぎ (2008年4月発行)



東京大学社会科学研究所 パネル調査プロジェクト
<http://ssjda.iss.u-tokyo.ac.jp/panel/>